

私 の 心 に 残 っ た 本



義のために戦ばせねばなり申さん

医学部講師
(生理学Ⅰ)

金子 葉子



「壬生義士伝」(上・下)

浅田次郎 著

(文藝春秋) 2000年

子供の頃から読書が好きな私は、学校や勤務先が変わると最初に行く場所は図書館だ。不思議なことにどこに行っても図書館の匂いは同じだ。古い本の匂いなのか。でも、古本屋とはちょっと違う。なんとなくほっとする。藤田保健衛生大学の図書館で小説を借りて好きになった作家は大勢いる。その中の一人、浅田次郎氏の「壬生義士伝」を紹介しようと思う。

戊辰戦争の緒戦である鳥羽・伏見の戦いが収束に向かう頃、夜更けに大阪の盛岡南部藩蔵屋敷に満身創痍の侍が辿り着いた。彼の名は、吉村貫一郎。盛岡南部藩を脱藩し、新選組の隊士となったが、彼は尊王攘夷の志士でもなければ、何百年と続いた理不尽な世の中を覆そうと考えていたわけでもない。彼は妻子を養うため、飢えさせないために人を斬ってきた。武士としての死に場所を探す新選組の隊士たちと袂を分かち、生きるため、生きて妻子の待つ盛岡に帰るため、一人市中を彷徨^{むか}っていた時に、南部藩の家紋である対い鶴丸の

入った提灯が目に入った。武士の体面をかなぐり捨てて脱藩した主家への帰参を願うが、蔵屋敷差配役であり、竹馬の友である大野次郎右衛門は切腹を命ずる。

南部藩領は「三日月の円くなるまで南部領」と言われるほど広大であったが、やませと呼ばれる冷風のために飢饉が頻発し、その度に多大な死者が出て藩の財政は常に逼迫していた。吉村貫一郎は南部藩の二駄二人扶持の足軽であった。幼い頃に父を亡くし、帰農する選択もあったが「貫一郎は武士の子にござんす」と、武士であることを選んだ。そんな貫一郎に母が言う。「んだば貫一郎。八幡様に誓うて下んせ。ひとつ。文武に精進して、身をば立て、子にひもじい思いはさせぬ、と。もひとつ。たとい病であれ戦であれ、幼子ば残して死ぬるような無体はさせぬ、と」

幼い貫一郎は文武に精進した。その甲斐あって足軽の身分



岩手山

ながら藩校で学問の助教を務めるのみならず、藩道場の師範代を仰せつかることになった。ところが、藩の財政窮乏のため、御役料をいただけるわけではなかった。親子四人、食うや食わずの生活を手内職で補う。妻のしづは病弱の上に、お腹には間もなく生まれる子もいる。しづは口減らしに死のうとする。それを止めに来た貫一郎に言うしづの言葉が凄まじい。「この体をば、食ろうてくらんせ」そこに、数え年9歳の長男がやって来て言う。「父上、どうか母上を叱らねで下んせ。母上もおぼっ子を産んで下んせ。わしは兄者ゆえ、腹などへりはせん。飯なぞ食わねでも良がんす」この時、吉村貫一郎は脱藩を決意する。

しづは、次男に父と同じ貫一郎と名を付ける。その貫一郎は、東京帝国大学農学部の教授となる。研究テーマは稲の育成と品種改良。「私の先輩方は不作の年でも百姓が飢えて死なずにすむ稲を作りました。私は、私のふるさとに、娘を売らずにすむ稲を育てたいと思います。親子兄弟が別れずに、貧しくとも幸せに暮らせる稲を育てたいと思うのです。」彼は父のことを知らない。周囲の人も彼には語ろうとしない。けれど、父吉村貫一郎の思いは、会うことの叶わなかった息子貫一郎に受け継がれた。

物語は、明治維新50年後の大正初期に、新聞記者が吉村貫一郎についてインタビューをする部分が主軸になり、その合間に蔵屋敷の奥座敷で死にきれず悶々とする吉村貫一郎の一人語りが挿入されている。語り部は、新選組の生き残りの隊士、藩校時代の教え子、組頭の間である。彼らが語る吉村貫一郎は、守銭奴、出稼ぎ武士と決して芳しいものではない。「死にたくないから人を斬る」という言葉は武士が口にできる言葉ではなく、斉藤一は「蛇蝎のごとく嫌っていた」と

語る。しかし、本心では、吉村貫一郎が己の宿命に屈せず、己の信じた義の道を見失うまいとし、武士として、男として、人として苦悩に抗い続ける姿に感銘を受けていたことを吐露する。

幕末という激動の時代の流れにもまれ、皆が大切なものを見失って右往左往している中で、吉村貫一郎は決しておれなかった。自分の欲とか他人の目といった余計なものに惑わされることがなかった。妻子を飢えさせないこと。あまりに真っ当でささやかな、でもこの時代の多くの人が見失っていたこと。それが男の務めだとはっきり見えていた。だからこそ、みっともないくらい生きることにしがみついた。家族を養うことが、吉村貫一郎の義であったと私は思う。

壬生義士伝は、子母澤寛氏の「新撰組始末記―新撰組三部作」へのオマージュだ。新聞記者だった子母澤氏は、新選組隊士の遺族や京都八木家の遺族に話を聞き、新撰組始末記を著した。壬生義士伝で吉村貫一郎について方々で聞いている新聞記者は、子母澤氏がモデルと思われる。新撰組始末記では吉村貫一郎について数行の記述があるだけだが、浅田氏は彼を主人公にして壬生義士伝を書いた。フィクションだとわかっていても、人斬り貫一と恐れられる一方で、壬生の子等に手習いを教え、故郷に仕送りをしていた吉村貫一郎が実在していたかのようだ。

作者の浅田次郎氏は、元自衛官、ピカレスク人生を経由し、現在小説家という一風変わった経歴の持ち主だ。“泣かせの次郎”という異名どおり、浅田氏の小説はどれも涙無くては読めないが、その中でも壬生義士伝は、吉村貫一郎の義と愛を貫く姿を描いた素晴らしい作品だと思う。

(当館所蔵 請求記号 913/Mib/(1), 913/Mib/(2))



姫神山